

## CONTENTS

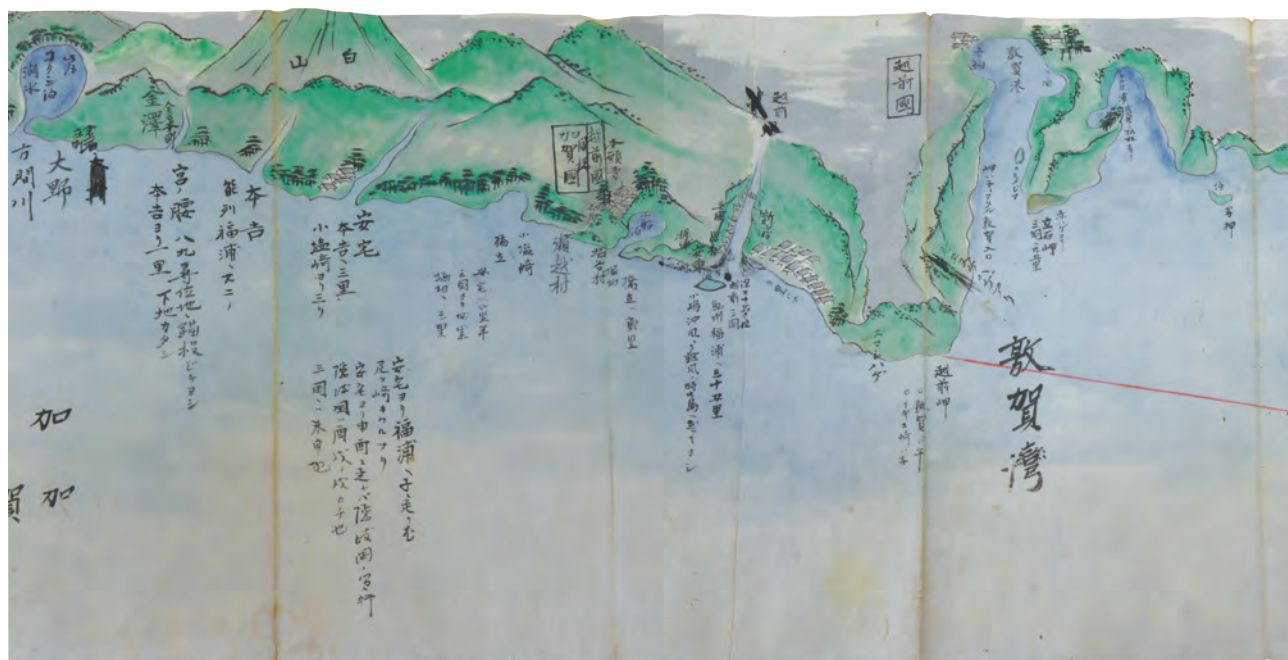
尾道市市史編さん委員会事務局だより

金光図書館所蔵「青木茂文庫」・・・1 - 3 頁

# 市史広報 ＊第6号＊

金光図書館の歩み・・・4 - 5 頁

小林和作の襖絵・・・6 頁



「北國路海上図」(部分)金光図書館蔵(青木茂旧蔵)

青木茂の父春太郎が明治18年(1885)11月に作成した。図には北前船寄港地のひとつ三国湊(福井県坂井市三国町)が見える。

旧尾道市域での市史として、『尾道市史』上中下巻(昭和14・15年)、『新修尾道市史』全6巻(昭和46・52年)がこれまでに刊行されていますが、その全ての執筆を担ったのが青木茂(1898・1984)でした。

尾道市制施行の年の明治31年(1898)に御調郡三浦村、現因島<sup>むくのうら</sup>に生まれた青木茂は、『山陽日報』、次いでその後身の『山陽日日新聞』、他に『備後時事新報』と、戦前には尾道の地域紙で記者・主筆として、戦後は金光教の教学研究部嘱託<sup>しよくたく</sup>の他、尾道市立女子専門学校の講師として教壇に立ち、同女専を前身とする尾道短期大学では助教授、次いで教授を務めました。

市史の編さんは、戦前の刊行時には病氣療養の為に新聞社を退社した後に、戦後の刊行時には神戸学院大学(教授)在職中に担当する事になり、『新修尾道市史』編さんの際には、編さんが慌ただしくなると来てと同大学を辞し、市史に専従専念され、病弱高齢の身で全6巻を完成されました。

この『新修尾道市史』編さんに入る前段階には、郷里の『因島市史』(全1巻・昭和43年)も手掛けられており、こちらも青木氏の単著と呼べるものでした。

今日の自治体史編さんでは、分野別にそれぞれ専門家が分担して執筆に当たるのが常です。そういう一大作業の柱(執筆)となる部分を、一人の手によってこなされたという経過(偉業)は、特筆に値します。



青木茂の古巣の一つである金光教の附属図書館には、青木茂の遺品となる資料群が、一括して没後に寄贈され、収蔵されています。

その「青木茂文庫」を、新市史編さんに伴う資料調査で全点を確認し、旧市史に関係するものを軸に、青木茂資料として、複写（撮影）による資料収集を実施しました。

分野別に整理されたそれら資料群の中から、目に留まる幾つかをここに紹介します。

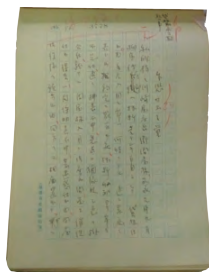
#### ◆ 旧市史編さんに伴う資料

「青木茂文庫」の柱となるのが、戦後に出た旧の市史（新修尾道市史及び因島市史）編さんに伴う資料群で、その大半は青木茂の執筆及び筆写原稿になります。

筆写原稿は、古文書を書き写したものになり、石高表等は、別途に統計表にまとめられたものも見られます。

筆写原稿に混じって、一部には古文書原本（現物）も含まれており、「青木茂文庫」は全て、金光図書館から広島県立文書館へ移ったものと見ていましたが、その内から漏れたものが存在する事を、併せて確認するに至りました。

下…古文書筆写資料より

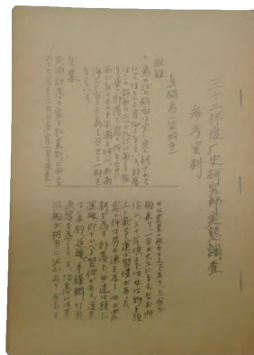


#### ◆ 尾道短期大学歴史研究部

尾道市立大学の前身となる尾道短期大学の教壇に立った青木茂は、学生有志で組織された歴史研究部（略称・歴研）の指導者（参与）として、学生による地域研究も牽引し、サポートしました。

「青木茂文庫」の内には、歴研で初期の頃に実施された離島調査に関する資料がまとまった形で遺されていました。

昭和32年度歴史研究部実態調査・真鍋島（笠岡市）



#### ◆ 文芸作品

市史関連の資料の他で、「青木茂文庫」において最も多く目に留まったのが青木茂筆による文芸作品です。

新聞記者だっただけに文筆は手慣れたものだったらしく、随筆を中心に、かなりの作品が遺されている事を再確認しました。生原稿から著作本、雑誌や新聞寄稿のスクラップブック、中には頼山陽を主人公とした小説、金光教関連のラジオドラマのシナリオと、実にマルチな才能が垣間見られます。

上…青木茂著『病床十年』金光教徒社、昭和24年刊  
下…『郷土芸術 耕地』第四号 尾道文藝会 大正13年4月1日発行



#### ◆ 尾道発の文芸誌

文芸資料の中には、地元尾道において編集・発行された文芸誌も確認されました。

大正時代に遡る『郷土芸術 耕地』は、尾道文藝会の編集・発行で、読者投稿による小説・論文及び随筆・短歌・俳句・詩が掲載され、今日見る『尾道文化』（尾道文化協会の文芸誌）の先駆的存在であると言えます。

「青木茂文庫」には、大正13年（1924）発行の第4号と第5号が遺り、この内の第5号は尾道市立図書館にも収蔵されますが、第4号は他に確認できませんでした（県立及び県内図書館と国会図書館には同誌の蔵書は無し）。

#### ◆ 健康雑誌『更生』

尾道発の文芸誌以上にその存在が着目されるのが、健康雑誌『更生』です。

糸崎にあった日赤広島支部糸崎療養所内の更生社の発行で、



上…『更生』昭和5年1月号 更生社刊。表紙絵は森谷南人子が手掛ける。  
下…創刊6周年記念講演会のビラ



# 金光図書館の歩み



尾道市と金光図書館(浅口市金光町)の位置図



金光図書館の外観

## 〈参考文献〉

・山縣二雄「金光図書館史稿本」(『図書館をめぐる日本の近世』私家版、1981年) 図書館報『土』(第1号、1948年2月)  
・ず・ばん編集委員会『生きてお役にたつ』図書館をめぐらして(ポット出版、2001年)  
・『赤色革命余話 露西亞小児団輸送記』(1938年)

この度、『尾道市史』『因島市史』『新修尾道市史』を執筆した青木茂の旧蔵文庫を調査するために、金光図書館を訪れました。そこで目の当たりにした金光図書館の特徴的な蔵書や、調査の合間に金光英子館長にお伺いした金光図書館の歩みにについて紹介します。

……

○金光図書館について  
金光図書館は昭和18年(1943)9月8日、太平洋戦争の戦況が傾き始めた頃、岡山県の農村地帯に創立されました。金光図書館創立の提唱者で初代館長を務めた金光鑑太郎は、金光図書館の創立について次のように志を語っています。

図書館という仕事は、目先だけのことを考えていてはできないものじゃあない。この戦争もいずれはどちらにかたはつくだろが、勝つても負けても戦後は荒野の原となることに変わりはあるまい。この時にこそお役に立たねばならぬ時がくる。

そもそも、金光教団は金光図書館以前より図書館創立の機運がありました。明治36年(1903)には金光中学校内の図書館を一般開放し、明治末期から大正時代にかけては、各地

に教会文庫が設立されました。そして、教祖60年大祭を期す昭和22年(1947)5月5日に金光図書館が開館したのです。その翌年、金光鑑太郎は図書館報『土』第1号の発刊の辞に次のように記しています。

図書館のための図書館では意味がない。利用され、活用され、生きてお役に立つ図書館でなくてはならない。

この時に示された指針は、その後の金光図書館の活動に脈々と受け継がれています。

## ○児童奉仕と点訳奉仕

金光図書館が開館した当時、児童書を求めて各地から大勢の子どもたちが来館しました。しかし、これは金光図書館にとっては想定外のこと、蔵書のほとんどが宗教にまつわる歴史や文学に関連する分野が中心でした。そこで、館長自ら自身の蔵書を、当時貴重とされていた児童書と交換して持ち帰り、開館の翌年には早くも児童文庫を開設して子ども達に貸し出しました。戦後の日本にアジア救済公認団体「アラ」から救援物資が送られた際も、戦火をまぬがれた金光図書館が絵本や教科書を受け入れ、児童文庫はさらに豊かになってい

が事故で汽車の石炭を浴び、失明してしまつたことにあります。生きる希望を見失つたかと思われましたが、点訳された図書に触れ、失ったはずの光を見出したといえます。現在も、金光図書館内の青い鳥点訳グループが継続して点訳を行い、全国の点訳を必要とする点字図書館や利用者の方々に直接届けています。

## ○神徳書院文庫について

各地に金光教の教会文庫が設立されつあつた大正11年(1922)、金光学園の初代校長であり金光教芸備教会初代教会長を務めた佐藤範雄により、広島県神辺町の芸備教会に神徳書院文庫が設立されました。神徳書院文庫は金光教で最初の独立館舎を持つ図書館として、当初すでに一万冊以上の蔵書を有しており、昭和60年(1985)3月に金光図書館に寄贈されました。神徳書院文庫は佐藤範雄の蔵書を元に二代教会長佐藤一夫の蔵書を組み入れて構成された文庫で、収集範囲は哲学、宗教、歴史、天文学、教育、動植物、医学、芸術、文学におよびます。



神徳書院文庫の様子

特筆すべきは、暦類や占いに関する蔵書が一群を成している点です。古くは保安4年(1123)から江戸末期にいたる「具注暦」(奈良から平安時代の日本で用いられた太陽暦による暦)54点を有し、東京大学史料編纂所の6年にわたる調査によつて、改めてその価値が見出されました。

また、近年、ロシア革命(帝政時代末期のロシアに起こつた人民革命)に関わる貴重な資料が偶然にも神徳書院文庫から発見されました。当時洋上避難を必要としていた、ウラジオストクの子ども達を日本人船長が救い、その時救われた子どもが次の世代に「陽明丸」という船の名前を語り継いでいったのだといひます。子孫の方が恩人の

きました。大切に保管された児童書の中には、金光図書館にしか所蔵されていない図書もあり、昭和34年(1959)にはラベルに「B」を付して貴重図書として保存されるようになりました。

このような経緯から、金光図書館の児童奉仕(公共図書館が児童に向けて行うサービス)が全国的に広まり、昭和37年(1962)11月には金光図書館で公共図書館部会児童分科会(公共図書館の問題について調査研究し、その発展を図る組織)の全国ワークショップが開催されました。



『どうのババール』の初版本

時を同じくして、視覚障害者のための点訳サービスが金光教操山教会長野方幸雄により進められました。はじまりは、岡山県の国鉄社員

日本人船長について尋ね歩いてい たところ、金光図書館に唯一『赤色革命余話 露西亞小児団輸送記』という図書を見つけた。その図書には確かに当時の様子が記されていたのです。このように、金光図書館には図書館の利用者に見出された貴重な図書が多数所蔵されています。

……

金光図書館には神徳書院文庫をはじめとする約24万冊の図書と、76年以上に及ぶ歴史があります。その歴史は、金光図書館初代館長を務めた金光鑑太郎の志を受け継ぐ図書館奉仕の歴史でもあります。

現在、金光英子館長は災害支援等を行う中で「絵本は子どもだけでなく、大人をも救う力がある」と確信され、図書館を第3の居場所として利用してもらいたいと準備を進められています。

末筆ながら、事務局の8日間に及ぶ調査に快く応じてくださった、金光英子館長をはじめ、職員の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

# 金光教蔵「小林和作」の襖絵



金光教所蔵の4枚からなる富士山を描く見事な襖絵―署名を見ると、「昭和十九年 燦樹」とあります。燦樹とは、尾道市名誉市民の画家・小林和作（1888・1974）が和作以前に用いた雅号になり（霞村<sup>かそん</sup>という号もある）、和作による襖絵の大作が、金光教に所蔵されていた事を調査番外で知るに至りました。

金光教4代教主が親交のあった和作に依頼して、教主室（現修徳殿）の襖絵として昭和19年（1944）に制作されたものになるそうです。

また、昭和47年（1972）5月には、客殿の襖に書をしたためており、和作と金光教との続いての親交が窺われます。

尾道時代の和作にとって最大のパートナーであった医師で当時の尾道文化を牽引した小野鉄之助も、その祖先が金光教と深いゆかりを持ちます（祖先の小野光右衛門のもとで、金光教の教祖が読み・書き・そろばんの手習いを受け、人格的にも大きな感化を受けたという）。

## 『新尾道市史』刊行計画

市制施行一二〇周年にあたる平成三十年度（二〇一八）を振り出しに、令和十年度（二〇二八）までの十一年計画で、新市域を網羅しての『新尾道市史』を編さんします。今後の刊行スケジュールは次の通りです。

|             |      |          |
|-------------|------|----------|
| 令和二年度（二〇二〇） | 文化財編 | 下巻       |
|             | 資料編  | 近世       |
| 令和三年度（二〇二一） | 資料編  | 近代・現代    |
| 令和四年度（二〇二二） | 資料編  | 古代・中世    |
| 令和五年度（二〇二三） | 民俗編  |          |
| 令和六年度（二〇二四） | 地理編  |          |
| 令和七年度（二〇二五） | 通史編  | 原始・古代・中世 |
| 令和八年度（二〇二六） | 通史編  | 近世       |
| 令和九年度（二〇二七） | 通史編  | 近代       |
| 令和十年度（二〇二八） | 通史編  | 現代       |

## 編集後記 \* 2020.1

新年おめでとうございます。

皆様方におかれましては、新春を晴々しい気持ちでお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中は、大変お世話になりました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、本紙は前号までに新市域を含めた尾道市域について特集してまいりました。今回は旧市町史を手掛けた青木茂の足跡を、金光図書館所蔵の「青木茂文庫」からたどっていきます。（I.H.）

※『市史広報』は年に2回程度の発行を予定しております。  
みなさんの様々なお声や情報をお待ちしております。

## WANTED

### 史資料や情報をお寄せください

古文書や古写真（写真絵葉書を含む）、古地図、尾道的话题を報じる古新聞など、市史編さん委員会事務局では、幅広い分野において尾道に関わる史資料を収集しています。また、無形の伝承（地域に伝わる言い伝えや独特な慣習、祭礼芸能等）についても収集対象となります。もし皆様のお宅や周辺で、あるいは地域で、そうしたものが発見された場合は、事務局へご一報ください。史資料については複製（写真撮影・コピー）を取らせていただくのみで、現物については速やかにお返しさせていただきます。情報提供は下記の事務局連絡先までお願いします。お電話での受付時間は平日8:30～17:00です。（文化財係：0848-20-7425）